

航士校秘史断片

上原区隊長殿の自刃



矢野 宏治

予科24-6
航空13-1
(川越市)

玉音放送

昭和20年8月15日、正午に重大放送があるので第一装着用で、大講堂に集合した航空60期一同（渡満組は不在）は、壇上に置かれたラジオから流れてくる玉音に寂として声もなく謹聴した。雑音がひどく、よく聞き取れませんでした。しかし、中途からすすり泣きが起こり、それが全体に波及し、講堂は慟哭の渦に包まれていた。

玉音放送が終わり、鈴木首相の談話に移ろうとしたとき、軍刀を抜いた将校がコードを絶ち切り、壇上に駆け上がり、「泣くのを止めよ。これは君側の奸のなせる仕業である。我々は国体護持のために徹底抗戦しなければならぬ」と正面切って怒号しました。

この場面、私の脳裏には確かに三人の将校が軍刀を掲げていた姿がはっきりと焼き付けられている。壇上に上がった将校は十三中隊の第二区隊長本郷大尉、第三区隊長山村大尉、第四区隊長栗野大尉の三人で、何れも

五十六期であったと確信している。（注1）

しかし、戦後書かれている物を見ると、壇上に駆け上がったのは本郷、山村両大尉であったとなっている。

三人の五十六期の将校が壇上に立った時、揃いも揃って同じ中隊の区隊長であったことに驚きの念を抑えられなかった。第一区隊長は五十三期の田中要少佐で、第二挺団長になり、操縦生徒を率いて満州に向かっておられた。

ここで不思議に思うのは、書物に書かれているのは二人の将校が壇上に立ち上がったということである。私の目のフィルムに焼き付いている二人の将校が確かに駆け上がった後から栗野大尉が駆け上がって、我々に檄を飛ばしたのは幻ではなかったか。大した問題でないかもしれないが、二人であったか、三人であったのか、今でも半信半疑である。

上原区隊長自刃の刀の行方は

青山嵩君（航空三の二）の葬儀の時、彼と航空で同区隊長だった淵村三男（9-8）君が弔辞を読み、火葬場で淵村君と二人で青山君の骨を拾い上げて無事にあの世に送ったが、その淵村君のことにしても是非触れておきたいことがある。

航空三中隊の上原重太郎大尉（五十六期）はご存知のように航空神社の前で、同期で同郷の荒武大尉の介錯で自決された。その時、使用した刀を復員の際、三中隊の六〇期で上原大尉と同県出身の士官候補生に託して実家に届けるよう指示があった。

戦後書かれた本によると、有村恰君（鹿児島二中一熊幼）が刀を託されて実家に届けたことになっている。大江志乃夫君（熊

幼〜航空十三の二）もそのように書いている。ところが実はもう一人刀を託された生徒がいた。それが淵村三男君（鹿児島一中〜熊幼）であった。

有村君のことはよく知られているが、淵村君のことは殆ど耳にしない。淵村君の言葉を借りると、

「俺の方が一足先に重富の上原さんのお宅を訪れたんだが、玄関にまず出てこられたお祖母（ばあ）さんが、俺を見るなり“ハラヨウ、ダモシタン、マッコテお前（ま）や重太郎どんじゃなかや、ゆこそ戻ってきやしたな。早（は）よ上（あが）いやんせ（あらま、どうしたことでしょう、本当に前はお前は重太郎どんじゃありませんか。よくこそ帰ってきましたね。早くお上がりなさい）”と抱きつかれんばかりなので、事情を説明するのに一時間近くかかってしまった。実は上原さんが士官学校を卒業して帰郷した時に、まだ、将校服を着用しておらず、士官候補生の服装のままだったので、ちょうど同じ服装の俺を上原さんと見間違えたらしいんだ。その時持参した刀は大きい方の刀で、二尺三寸あった。介錯刀としては少し短い。介錯するなら三尺物でなければ仲々斬れるものではないが、その刀に歯こぼれがあったので、介錯した刀と見て間違いないと思う。」

この淵村君の述懐は、青山君の荒武大尉が介錯したが一旦斬り損じて、その後やっと斬り落としたという話と符合する。有村君が持って帰ったという刀の方が小刀で、これが上原大尉が自らの手でうつぶせに突き刺した刀であったと思われる。淵村君の言は、実際の当事者でなければ判らない雰囲気と実感のこもったものであった。これ

を以てしても、上原大尉の自決の時の二振りの刀剣のうち、大きい介錯刀を淵村君に託され、小刀を有村君が持って帰ったということになる。大江志乃夫君がどうして淵村君のことに触れなかったのかと淵村君に尋ねると、「大江と有村は熊幼で同じ訓育班だったからだろう」とのことであった。

このような事でも、後年戦後史を研究する者は、歴史学者が書いたものに真実ありとして、有村君の事だけが後に伝わり、淵村君のことは無視される恐れがある。歴史とは一面このようにして成り立つ性質のものかも知れない。

青山君がある時話してくれた。

「上原さんが自決する前夜、自習室に自分の区隊員全員を集めて、上原さんは机の上から仁王立ちになって訓示を垂れていた。俺は区隊が違うから自分の机から上原さんの後ろ姿を眺めていたんだが、電球も薄暗く感じ、何と云うのかなあ、上原さんの背中に死相が出ていて、この人必ず死ぬなと思ったよ。」

上原区隊長の思い出

上原大尉については、私の一つの思い出が印象深く残っている。

三月に航空二次が着校した時に、合同の入校式が行われた。整列していると、後方で「ウムよろしい」「指先を伸ばせ」「目ン玉を動かすな」の力強い声が聞こえてきた。周りから「上原区助だ」の囁きが耳に入ってきた。後で考えると私の属していた十三中隊の列の後方に三中隊が並んでいた。その方を横目で見ると中肉中背のガッシリした体躯の赤銅色をした区隊長が生徒

一人一人の前に立って、一々注意を与えている所であった。この区助は生徒の信望を得るに違いないと思った。

上原大尉が自決した噂が伝わった時、「上原大尉の遺体はどうなっているのだ」と誰かに聞いたところ、「生徒集会所に安置されているらしい」との返事を得て、昼食後一人で集会所に出かけた。相変わらずの灼熱の太陽が照りつけていた。集会所の庭に面した縁側の板の間だったか今では定かでないが、白い布を被せた上原大尉の遺体が安置されていた。棺桶が手に入らないのか、急場で間に合わなかったのか、遺体全体を白布で覆っているに過ぎなかった。白布は髪の毛も足先も覆い尽くしていた。しかし、布の高低で体型はそのまま感じ取れた。簡素といえば、これ程簡素に安置された遺体を目にした事はなかった。師団長を斬殺し、徹底抗戦を主張した硬骨漢も今は空しく亡骸となって静かに人気のないだっ広い集会所にポツンと置かれたままであった。敗戦の非情さを痛感せざるを得なかった。

不思議なことに周りには人の気配がない。衛兵が当然立っているものと思っていたが、それすら一切居ません。何だか別世界に足を踏み入れたようだった。五分か十分か、の中で、そこだけに、ただ上原大尉とそれに向き合っている私の空間があるばかりであった。森として物音一つなければ、猫の子一匹いなかった。

遺体を覆っている白布に少しばかり赤い血の染まりが目にとまり、縁先の庭にあった葉鶏頭の真っ赤な色が深く印象に残った。そよとも風が吹かない中で、その空間は上原大尉と私の対決の場であった。

戦後、青山君にこの時のことを話すと、彼は当然衛兵が立つべきなのに、いなかったというのはおかしいと言っていた。もしかしたら衛兵交替の空白時であったかも知れないが、それは判らぬ。(注2)。これも不審の一つとして残っている。

しかし、これらのことも全て往事茫々として夢の如しというところである。

《注1：吉永朴航士校幹事『私の足跡』によれば、「六、七人の将校が壇上に向けあがり、絶叫した。」とある。注2：六十期生史の加藤治『終戦日誌断片』によれば、「此ノ夜(21日)三時ヨリ衛兵ニ立哨ス」とある。》